

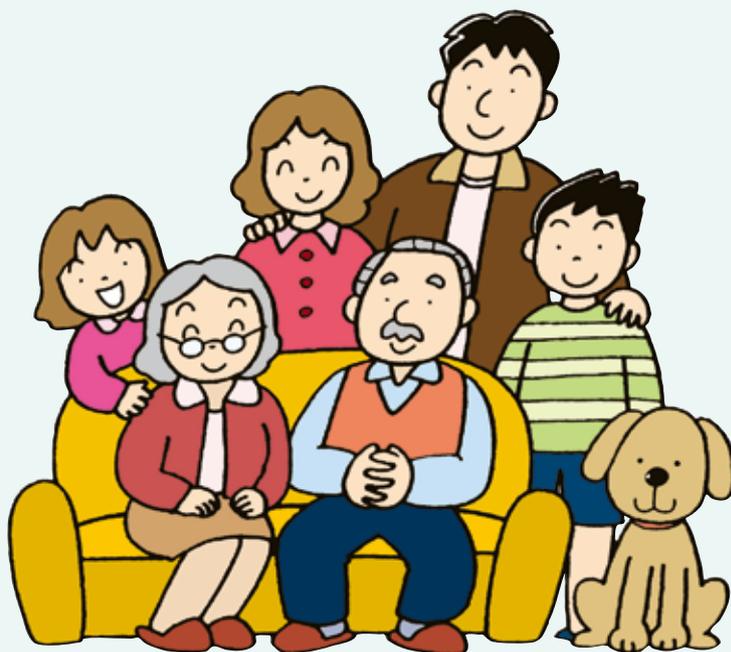
あか
明るいまちづくりをめざして

みんなで一緒に考えよう

第35回全国中学生人権作文コンテスト
法務大臣賞受賞作品

「ぼくの生きる道」

法務省人権擁護局・全国人権擁護委員連合会主催



43号

新宮市
新宮市教育委員会
新宮市人権尊重委員会

「ぼくの生きる道」

ぼくは障害者だ。なぜって？わからない。生まれつきそういうことになっていた。今は何とか歩けるが、体のバランスを取るのがすごく難しいし、字が書けないという致命的なハンディキャップを抱えている。

ぼくが一番古い記憶は保育園の時だ。当時三歳以上は同じ部屋で生活していて、その時に、ひとつ年上の子から「想ってなんですぐ転ぶの？枯れたチューリップみたい。」と笑いながら聞かれたことがある。その時ぼくは、「分かんないよ、そんなの。」と答えた。本当の答えをあまり知らなかったからである。



だけど、小学生ぐらいの時に（自分はこの運動命なんだ）と悟った。

運動会の時だ。練習でもうまくついていけなかったぼくは、本番でもダンスの移動を間違えて、大幅に皆より遅れてしまい、大恥をかいた。泣いたりしなかったが、心の中で叫んだ。「全ては、この不自由な体のせいだ、あーあ、こんな体いらないよ。」と。

こんな体をもっていて、大変でしょと言う人がいる。もちろん大変だ。例えばいじめ。これは、障害者じゃない人にもあるかも知れないが、それとはわけが違う。障害者に対するいじめは、正直言って「いじめ」ではなく、「差別」だからだ。

ぼくの体験談だが、ぼくは今年、住んでいる市主催のキャンプに参加した。その時の参加者の中で、ぼくが最年長だった。だから、必然的に班長になってしまった。翌日、班員がうるさかったので何回か注意したが、全く効果がない。先生が出る幕だとも思ったが、先生方はちょうど会議中だった。仕方がなくぼくはかなり強く、「おい、静かにしろよ。」と言った。返ってきた言葉は「ウルセーよ。障害者のくせに威張るな。」だった。ぼくにはかなりキツイが、こんなことは日常茶飯事だ。

ここまでネガティブな話が続いたが、しかし、ぼくの人生が暗闇だけかといわ

れるとそうではない。いい経験けいけんもしている。

ぼくは、小学六年生の時に、はじめてサーフィンサーフィンを体験した。ボランティアのサーファーに教えてもらう機会きかいを得たのだ。

最初に、海の横の湖うみ よこ みずうみみたいところで、SUPサ ッ プという棒ぼうを持ってボードたに立つことを練習れんしゅうして、慣れてきてから本格的に海うみに出た。周りにはたくさんまわのサポートしてくれる人が居たので、安心あんしんだった。ボードに寝そべて波なみに乗るボディボードから始め、だいぶタイミングがつかめてきたところで、初めて立つことに挑戦たした。・・・もちろん、失敗しっばい。波が押してくる中、ボードが傾かないように調整ちようせいし、立てるほど、ぼくは器用きようじゃない。何回も落ちて、溺れそうおぼになって、這い上がって辞めたくもなかったが、コーチは諦めることを許さなかった。「障害しょうがいに甘えるな、やれば出来る。お前なら出来る。どうしてもものところは手伝ってやるから。」と、でも、時間じかんがたつほど、ぼくの足は重くなる。体力の限界げんかいが近づいていた。ぼくは、コーチに後五回でやめさせてくれとお願いしてしまった。その五回のうちの二回目、コーチが「いい波が来た、いけるぞ、想。」と叫んだ。ぼくは、最後の力を振り絞り、今まで教えてもらった通りに立つ準備じゆんびをした。全身の力をひざと足に集中させて立つ。



・・・立った。生まれて初めてのスローモーションだった。すごいでしょ！立った！このぼくが波に乗ったんだ！・・・

あれ？と気づいた時には、板から落ち、水の中だった。海から出た時はもうフラフラだったが、とても気分が良かった。波に乗っている時の風、海の音、すべてが爽快そうかいだった。そして、何よりも自分に自信がもてた。このぼくが、サーフィンが出来たんだ、最初は、何も出来なかったけど、頑張れば出来るんだ。障害なんて関係ない、要は自分がやるか、やらないか、出来ないことなんて何もない、もう何も怖くないぞ、とこの経験でそんな自信を得ることが出来た。これも教えてくれたコーチやサポートの方達かたたちの支えがあったからだと思う。

ぼくは障害者だ。たくさん嫌な思いをしてきたし、大変な思いも常にしている。でも、おなじくらい人から優しくされてきた。だから、何とか毎日元気に過ごせ

ている。すべての人が相手を思い、優しくしたり、むやみに人を傷つけることを
しない社会になればいいと切に願う。そしたら、どんな人もその人らしく生きる
ことが出来ると思う。

これからぼくは、周りの方への感謝を忘れずに、不自由な体とうまく付き合い、
少しの手助けは必要だけれど、やれば出来るという自信をもってやっていきたい
と思う。障害があろうがなかろうが、ぼくらしく生きていく。時に少しブサイク
だろうが、それがぼくの生きる道だ。

この作品は、第35回全国中学生人権作文コンテストで法務大臣賞を受
賞した千葉県・浦安市立高洲中学校一年 小林 想さんの作品です。作者は
小学生のころ、自分に向けられた心ない言葉や態度に、『いじめ』ではなく
『差別』だと受け止めた思いから、作者の心の痛みが伝わってきます。そし
て、小学校六年生の時のサーフィン体験では、諦めずに繰り返し挑戦し、つ
いにボードに立つことができた文章は、その様子を目の当たりにしているよ
うな力強い表現で読者に感動を与えてくれます。作者はこの体験により「頑
張れば出来るんだ。障がいなんて関係ない、要は自分がやるか、やらないか、
出来ないことなんて何もない…」と達成感を表現しています。文末には「す
べての人が相手を思い、優しくしたり、むやみに人を傷つけることをしない
社会になればいいと切に願う」と綴られ、作者の思いと優しくも強い人柄を
感じます。

市民のみなさまには、この作品をご一読いただくことによって、障がいの
ある人たちへの理解を深め、障がいがあってもなくても、だれも分けへだて
られず、お互いを尊重して、差別のないだれもが安心して暮らせる社会を実
現したいものです。

※ 作文内容は、原文をそのまま掲載しています。

ひろ ころ おも
広げよう やさしい心と思いやり